概説 ゾロタヤ・オルダの首都, 旧サライと新サライの歴史（翻訳・注釈）

アレクサンドル V. パチカロフ，長峰博之（翻訳・注釈）*

Ocherk po istorii Starogo i Novogo Saraev – stolits Zolotoi Ordy

(Japanese translation with notes)

Aleksandr V. Pachkalov, Hiroyuki Nagamine (tr. and notes)

This paper is a Japanese translation of A.V. Pachkalov, “Ocherk po istorii Starogo i Novogo Saraev – stolits Zolotoi Ordy,” *Azerbaidzhan i azerbaidzhantsy*, 103/104(1/2), 2009, pp. 122–128. Regarding Sarai – the ‘capital’ of the Jochid Ulus – it is the established theory that Old Sarai was located at the Selitrennoe site, and New Sarai at the Tsarevskoe site, both on the Akhtuba river, a tributary of the Volga. However, new theories that disagree with this have emerged: these theories claim that there was only one Sarai (Selitrennoe), or that New Sarai was the Selitrennoe and Old Sarai was located at different places. Among them, Pachkalov is leading the new theories, according to which New Sarai was located at the Selitrennoe site, while Old Sarai at the Krasnoyarskoe / Krasny Yar site in the Volga Delta. The article translated here is the most concise survey of the author's theory, based on archaeological and numismatic findings. Another reason for selecting this article is that it is a concise but well-crafted summary of the historical sources on Sarai. In the translation, the article itself does not contain many notes on the historical sources, but where possible, these are supplemented with a ‘translator's note’. We hope that this will be of assistance in future research on Sarai.

KEYWORDS: ‘Capital’ of the Jochid Ulus, Old Sarai, New Sarai, Krasnoyarskoe / Krasny Yar site

訳者序

本稿は，A.V. Pachkalov, “Ocherk po istorii Starogo i Novogo Saraev – stolits Zolotoi Ordy,” *Azerbaidzhan i azerbaidzhantsy*, 103/104(1/2), 2009, pp. 122–128 の日本語訳である。著者アレクサンドル V. パチカロフ氏は

* 一般科（Dept. of General Education）, E-mail: h_nagamine@oyama-ct.ac.jp; gamaja.yokaton.13@gmail.com

現在 A.M. ゴーリキー記念文学研究所 Literaturnyi institute imeni A.M. Gor′kogo（モスクワ，ロシア連邦）の准教授 dotsent であり，モンゴル帝国の一政権であるジョチ・ウルス（ゾロタヤ・オルダ）[訳者注1)] について精力的に研究を発表している気鋭の歴史学者・考古学者・貨幣学者である。氏の研究は多岐にわたるが，その成果は A.V. Pachkalov, *Zolotaya Orda po dannym numizmaticheskikh istochnikov: monografiya*, Moskva, 2018, A.V. Pachkalov, *Materialy po istorii denezhnogo obrashcheniya Zolotoi Ordy: monografiya*, Moskva, 2020 などにまとめられている。最近では，*The Cambridge History of the Mongol Empire*, Michal Biran, Hodong Kim (eds.), Cambridge, 2023 にも“Archeological Sources: The Chaghadaid Khanate”を寄稿している。

そのパチカロフ氏が近年牽引してきたのが，ジョチ・ウルスの「首都」[訳者注2)] サライの数と位置をめぐる議論である。サライはバトゥ（1255/6 年没）の西征（1236–41 年）後の創建とされ, およそ 13〜15 世紀にかけてキプチャク草原西部のヴォルガ川下流域に存在した。著名な都市であるが，じつはサライをめぐる文献史料，貨幣資料，発掘調査の解釈については未解決な部分が多い[訳者注3)]。「旧説」では，バトゥによって旧サライ（サライ・バトゥ）が，ベルケ（在位 1256?–66 年）によって新サライ（サライ・ベルケが建設されたとされ（ベルケが建設してウズベク［在位 1313–41/2 年］のときに移転したとも考えられた），前者はヴォルガ川支流のアフトゥバ河畔のセリトレンノエ遺跡に，後者は同じくアフトゥバ河畔のツァリョフ（ツァリョフスコエ）遺跡に比定された（関係地図参照）。しかしその後の研究で，サライ・バトゥとサライ・ベルケ／バラカはともに旧サライ（セリトレンノエ遺跡）のことであり，新サライ（ツァリョフ遺跡）への移転はウズベクの治世末期かその死の直後とされた[訳者注4)]。これがいまほぼ「定説」となっている。しかし，これに異を唱える「新説」が現れている。これらの新説は，サライは一つでセリトレンノエ遺跡，あるいは新サライこそセリトレンノエ遺跡であることなどを主張している。なかでも，最も精力的に新説を展開しているのがパチカロフ氏であり，氏の説によれば，新サライはセリトレンノエ遺跡であり，旧サライはヴォルガ・デルタのクラスヌイ・ヤール（クラスノヤルスコエ）遺跡であるという。これらはいまのところおもにロシア語圏の研究のなかで提唱されているのみであるが，傾聴に値する重要な議論と考え，訳者は最近別稿においてこの問題について可能な限り検討した。ヨーロッパ地図や近年新たに注目されるようになった史料などを再検討した結果，訳者自身はサライはやはり 2 つ存在したと考えるが，残念ながら，現時点ではその位置に関して明解な結論を出すことはできなかった[訳者注5)]。

関係地図（Emma Zilivinskaya, Dmitry Vasilyev, “Cities of the Golden Horde,” R. Khakimov et al. (eds), *The Golden Horde in World History*, Kazan, 2017, p. 636 をもとに訳者作成）

2001 年にはじめて新説を公表して以来, パチカロフ氏は関連する多くの論文を発表してきた。なかでも，今回訳出する 2009 年の論文は，考古学・貨幣学の成果をふまえたうえで最も簡潔に氏の説を述べるものである。訳者自身は現時点では氏の説の是非について最終的な判断をできていないが，やはり注目すべき重要な説であり，紹介する価値が大いにあると考え，ここに訳出するものである[訳者注6)]。この 2009 年の論文を選んだもう 1 つの理由は，この論文が簡潔ながらもサライに関する史資料を手際よくまとめており，今後のサライ研究に資するものと考えたからである。前時代の遺跡とサライの関係，ハンの埋葬地，サライにおけるイスラームやキリスト教など，サライに関わる諸問題が提示されていることも重要であろう。訳出に際しては，氏の論文自体には資史料の出典に関する注が少ないが，可能な限り「訳者注」として補足した。また，史料の年代や君主の在位年代など，本文内の〔　〕も訳者による補足である。あわせて，今後のサライ研究の一助になれば幸いである。KEYWORDS も訳者が付したものである。なお，固有名詞の表記や転写の方法については小松久男他（編）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社, 2005 に，ジョチ・ウルス君主の在位年代・没年については赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房, 2005 巻末の「ジュチ裔系図」に準拠した。

最後に，今回の日本語訳の作成について快諾くださり，そして訳者の質問にも逐一丁寧に答えてくださった著者アレクサンドル V. パチカロフ氏に心より感謝申し上げます。また，日本語訳の出版を承諾くださった原論文掲載雑誌の発行元であるアゼルバイジャン国立科学アカデミーにも感謝申し上げます。

本文

残念ながら，文献史料のなかのジョチ・ウルス諸都市に関する情報は多くはない。国家の首都であった都市サライについてさえも，中世の文献史料（アラビア語，ペルシア語，テュルク語，西ヨーロッパ諸語）は最小限の情報しか含んでいない。サライについて最も詳細に記しているのは，イブン・バットゥータ〔1304–68/9 年〕，イブン・アラブシャー〔1392–1450 年〕，ウマリー〔1300 頃–49 年〕といったアラブの著者たちである。より重要な意味をもつのは，考古学と貨幣学など，他の情報源からのデータである。19 世紀以来，ヴォルガ川下流にあるゾロタヤ・オルダ Zolotaya Orda〔ジョチ・ウルス〕最大の都市遺跡群は考古学的発掘の対象となり，20 世紀にはゾロタヤ・オルダ時代最大の遺跡群の研究が組織的に行われるようになった（P.S. ルイコフ，F.V. バロッド，G.A. フョードロフ・ダヴィドフおよび他の研究者たちによる発掘）。現在までに，ゾロタヤ・オルダ諸都市のクロノロジー，物質文化，生活様式に関する多くの資料が蓄積されている。サライでは貨幣発行が行われており，貨幣はこの都市の政治・経済史に関するユニークな史料であるため，貨幣学のデータは重要である。

都市サライは 13 世紀半ばから 15 世紀末までの文献史料に記録されている。ギョーム・ド・ルブルクの証言（「エティリア〔ヴォルガ〕に面してバアトゥ〔バトゥ〕が作った新しい町」）[訳者注 7)] が，サライに関する最初期の記録である〔1254 年〕。サライ創建の正確な日付は不明である。中世の著者たちのなかには，バトゥのあとに統治したベルケ・ハンの治世に都市が建設されたと伝える者もいる。中世の史料においては，たんに「サライ・ベルケ」と呼ばれることもある。学者 V.V. バルトリドの見解によれば，これはサライが「ベルケの治世になって・・・その言葉の本来の意味での都市に変わった」ことによって説明される（Bartol′d, V.V., 2002, p. 507）。著名な歴史家 A.N. ナソーノフは，「サライ」と「ベルケ」が結びついたのは，イスラームを受容した最初のゾロタヤ・オルダの君主であるベルケの名がムスリムの著者たちによく知られていたことに関係していると考えた（Nasonov, A.N., 1940, pp. 119–120〔訳者注 4）参照〕）。諸史料にサライ・バトゥとサライ・ベルケの名前が存在していても，それは必ずしも 2 つのサライが別々に存在したことを示すものではないと，この歴史家は強調したのである。

19 世紀前半以来，ゾロタヤ・オルダの歴史研究に捧げられた文献のなかで，ゾロタヤ・オルダの首都（あるいは複数の首都）の位置比定の問題はとくに重要な位置を占めてきた。首都の数にしても，研究者によって異なる見解が示されてきた（ジャーニーベク〔在位 1342/3–57 年〕の時代から貨幣に新サライという銘が現れるが，一部の研究者はこの「新」を拡張した旧都市の新しい街区と理解している）。ある研究者はサライという 1 つの都市が存在したことを長くそして強く主張したが，またある研究者は，サライはやはり 2 つあったと同様に強く主張した。これらの都市（あるいは，この都市）はどこにあったのか，どの考古学遺跡に比定されるのか，という問題は非常に紛糾している。

20 世紀を通じて主流となった伝統的見解は，2 つのサライ，すなわちセリトレンノエ遺跡 Selitrennoe gorodishche（アストラハン州）の地の旧サライと，ツァリョフ Tsarevskoe 遺跡（ヴォルゴグラード州）の地の新サライ（サライ・アッジャディード〔新サライの意〕）が存在したという考え方である。しかし，近年証明されたように（Evstratov, I.V., 1997），ツァリョフ遺跡は都市グリスタン Gyulistan の遺跡である。そのおもな論拠は，ツァリョフ遺跡の年代比定は史料上でグリスタンが言及される時期およびグリスタンにおける貨幣の発行時期に一致するが，新サライにおける貨幣の発行時期はツァリョフ遺跡が存在した時期には一致しないというデータである（当該時期の新サライの貨幣が知られているが，それらはツァリョフ遺跡の領域からはまったく見つからない一方で，セリトレンノエ遺跡には存在する）。今日知られている中世地図，文献史料，考古学のデータには，サライ・アッジャディードとツァリョフ村近くの遺跡を明確に結びつけうるような情報は含まれていないのである。

20～21 世紀の変わり目に，セリトレンノエ遺跡の地に 1 つの首都としての都市サライが存在したという説がさかんに唱えられた。しかし，この仮説は疑問を生じさせる。すでに 13 世紀には，サライでの銀貨の発行がはじまっている。14 世紀最初の 3 分の 1 には，サライでの銅貨の集中的な発行も行われている。それにも関わらず（セリトレンノエ遺跡では数千枚からなる代表的な貨幣コレクション kompleks が収集され，出版されている），セリトレンノエ遺跡の貨幣資料が示しているのは，1330 年代半ば以前に発行された貨幣がきわめて少ないということである。一方で，1340 年代に発行されたサライの貨幣は，ヴォルガ・デルタを含む他の遺跡から見つかっている。

ウズベクの治世以前のサライは大都市だったのだろうか？ おそらく，13 世紀のサライは 14 世紀のサライよりもかなり小規模だったはずであり，考古学的にも，ゾロタヤ・オルダ初期の首都は，その国家最盛期の最大都市ほどの規模の遺跡ではないはずである。実際にセリトレンノエ遺跡に初期のジョチ家の貨幣がまったく存在しないということは，そこにゾロタヤ・オルダの最初の首都があったと考えることはできないということである。

1340 年代初頭，サライ・アッジャディードにおける集中的な貨幣発行が開始されている。この点に関して，セリトレンノエ遺跡にゾロタヤ・オルダ唯一の首都が存在したという説の支持者たちは，修飾語「アッジャディード」（「新」）は，〔首都の〕移転ではなく，ウズベク・ハンの治世末期の都市の拡張，すなわちサライにおける新街区の建設に関係するとみなした。セリトレンノエ遺跡に初期の貨幣（13 世紀後半～14 世紀最初の 3 分の 1）が存在しないという事実を，一つの首都が存在したという説の支持者たちは以下のように説明した。すなわち，初期の層は〔未発掘のままで〕セリトレンノエ村の下にあるのであり，その遺跡で最も調査され，貨幣の大部分が発見された区域はウズベク統治期に出現したところで，それを反映して修飾語「新」がサライに付されたという。長い間，現代のセリトレンノエ村自体の場所では考古学的調査は行われてこなかった。しかし，村の領域で行われた最新の発掘では，村の下の文化層 kul′turnyi sloi は非常に貧弱であるか，あるいは存在しないことが判明した。このように，セリトレンノエ村の下の層においても，遺跡自体の領域においても，初期のサライの痕跡は発見されなかった。それどころか，遺跡の興隆そのものが，サライに修飾語「新」が付されたことに関連づけられるのである（セリトレンノエの地に都市が興ったのは 1330 年代であり，〔文献史料における〕新サライの最初の記録は 1340 年代初頭である[訳者注8]）。興味深いのは，セリトレンノエ遺跡の地に都市が興った時期と，ヴォルガ・デルタの遺跡が破壊された時期がまさに同時期（1330 年代）ということである（サモスデルカ Samosdel′skoe 遺跡の

貨幣資料によれば，それは1330年代である）。また興味深いことに，都市サライの洪水に関するマリニョッリの報告も同時期である[訳者注9)]。そして，セリトレンノエ遺跡は川の増水が届かない場所にあるのである。

ゾロタヤ・オルダに2つの首都，2つのサライが存在したという説の支持者たちは，首都の移転の理由についてさまざまな見解を提示してきた。私の見解では，首都の移転はカスピ海の水位の上昇，そして1330年代にヴォルガ・デルタの多くの居住地域が水没したことに関係している。1330年代，短期間のうちにゾロタヤ・オルダの新首都がセリトレンノエ遺跡の地に繁栄したことについては，遺跡から発見された1330年代の貨幣の豊富さ，そしてそれ以前の貨幣が非常に少ないことが証言している。1340年代初頭には，セリトレンノエ遺跡の地において，ゾロタヤ・オルダの新首都であるサライ・アッジャディードの銘をもつ貨幣がすでに発行されている。

私の考えでは，ゾロタヤ・オルダの最初の首都（13世紀～14世紀初頭のサライ）があった場所として最も可能性が高いのは，13世紀～14世紀初頭の貨幣をもつ居住地のあるヴォルガ・デルタと考えられる（例えば，クラスヌイ・ヤール Krasnoyarskoe 遺跡である可能性があるが，まだ十分には研究されていない）。マヤチヌイ Mayachnyi 丘陵の埋葬地（この埋葬地はクラスヌイ・ヤール遺跡に近接しており，ある研究者の意見によれば，都市のネクロポリスである）の調査中に13世紀から14世紀初頭の大量のジョチ家の貨幣が発見されたこと，そして埋葬地にジャーニーベク統治期の貨幣がまったく存在しないことは，この遺跡がその時代〔13 世紀～14 世紀初頭〕のものであると考えうる根拠になる。マヤチヌイ丘陵の埋葬地では，（銀・金製品をともなう）富裕者の埋葬の割合が最も高いことも注目される。これらの埋葬が当時の政治的エリートの代表者のものである可能性は否定できない。現在，初期のサライがクラスヌイ・ヤール遺跡の地にあったという確証はない。というのも，初期のサライがまだ考古学者には知られていない遺跡である可能性もあるからである。しかし，私の考えでは，現在知られているデータにもとづけば，クラスヌイ・ヤール遺跡が初期のサライの位置比定において最も可能性の高い候補地である〔訳者注6）参照〕。一方で，現時点ではすべての研究者が，サライ（あるいはサライの一つ）は14～15世紀最大の考古学遺跡の一つであるセリトレンノエ遺跡にあったと考えられることに賛同している。

サライは巨大な帝国の中心であり首都であっただけでなく，同名の地方の中心でもあった（中世史料には「サライ帝国 tsarstvo」「サライ地方 oblast′」「サライ地域 mestnost′」が記録されている[訳者注10)]）。ヨーロッパ地図において，14世紀のカスピ海はときに「サライの〔海〕」あるいは「サッルの〔海〕」と呼ばれた。当時の世界でサライの名がよく知られていたことは，中世地図にこの都市が頻繁に記載されたことからもわかる。サライに関する情報はイングランドにまで届いていた。ジェフリー・チョーサーの有名な『カンタベリー物語』では，「タルタル〔モンゴル〕国のサライでは，ロシアに戦いをしかけた王が住んでいた」と物語られている（物語の舞台の一つはサライである）[訳者注11)]。

セリトレンノエ遺跡（アストラハンの北方120キロ）に位置したサライは，東ヨーロッパとムスリム世界における最大の中世都市の一つであった（例えば，中世の著者フィリップ・ド・メジエール〔1327–1405年〕の情報によれば，都市サライはカイロの4倍であった[訳者注12)]）。中世アラブの著者の一人によれば，都市には約75,000人が住んでいた（Tizengauzen V.G., 1884, pp. 549–550）。先行研究 istoriografiya においては，最盛期の都市の人口は10万から20万人というさらに大きな数字も示されている[訳者注13)]。

先行研究において示されているセリトレンノエ遺跡の規模はじつにさまざまである。長年にわたり遺跡発掘のリーダーであった G.A. フョードロフ・ダヴィドフの見解によれば，サライはアフトゥバ〔川〕に沿って 3〜4 キロにわたって広がっていたという（Fedorov-Davydov G.A., 1994, pp. 25–26）。しかし，それ以前の研究者たちは，この遺跡の規模をより大きく，36 平方ヴェルスタ〔約 41 平方キロメートル〕におよぶとしている。ただし残念なことに，19 世紀にはすでに，この遺跡の地表には中世の建築物は一つも残っていなかった。

セリトレンノエ，ツァリョフ，クラスヌイ・ヤールの遺跡においては，モンゴル時代以前の層は見つかっていない。しかし，多くの研究者が，モンゴル以前の都市サクスィーン Saksin とスムメルケント Summerkent の位置をサライ遺跡の地に，すなわちセリトレンノエ遺跡の地に比定してきた。サライの遺跡とハザルの首都イティルは近接していたという説もまだ証明されないままである[訳者注14]。

考古学的発掘調査は，ゾロタヤ・オルダ時代のヴォルガ川下流域において都市文化が高度に発達していたことをはっきりと証明している。セリトレンノエ遺跡に関しては，壮大な建築物と発達した給水システムがこのことを裏付けている[訳者注15]。

サライ（とくに 14 世紀前半）は手工業と交易の最も重要な中心地であった。セリトレンノエ遺跡の発掘調査では，さまざまな種類の手工業生産の痕跡が考古学的に確認された。サライは二つの重要な国際交易ルート，すなわち，西ヨーロッパと中国を結ぶ大シルク・ロードの北部（フィレンツェの F.B. ペゴロッティによる有名な『商取引実務』〔14 世紀前半〕には，交易ルートのこの部分についての詳細な記述がある[訳者注16]）と大ヴォルガ・ルートの交差点にあった。大草原から何千キロも離れた場所で作成された 1375 年の有名なカタラン・アトラスには，キャラバンの絵の横に「このキャラバンはサッラ〔サライ〕帝国を発ち，アルカタイオ〔中国〕に向かう」という書き込みがある[訳者注17]。サライには大規模な奴隷市場があったという情報もある[訳者注18]。中央アジア，インド，中国に向かうカトリック宣教師たちも都市サライを通った。この都市にヨーロッパ商人がいたことを示す物的証拠となるのは，近年セリトレンノエ遺跡で発見された，おそらく織物の交易に用いられた一連の西ヨーロッパ製の鉛の印章である。中国，イラン，西ヨーロッパの陶磁器の発見は，この都市の交易関係を鮮やかに映し出している。セリトレンノエ遺跡では，膨大な数のジョチ家の貨幣（場合によっては外国の貨幣）が確認されている。サライにおける銀貨と銅貨の発行のピークは 14 世紀である（貨幣製造の痕跡，つまり貨幣の〔打刻前の〕原形 zagotovka がセリトレンノエ遺跡から見つかっている）。インド，中国，古代ロシア，イラン，その他の貨幣が発見されたことは，この都市が非常に遠い地域とつながっていたことを物語っている。遺跡の調査中には，銀貨と銅貨からなる埋蔵貨 klad も偶然発見された。

同時に，サライの最盛期においても，ここはハンの定住地ではなかったことには注意する必要がある。ゾロタヤ・オルダの歴史がはじまって以来，サライ（交易と手工業の中心）とオルダ Orda，すなわち君主の遊牧の本営は並行して存在していた。ウマリーはサライにあるハンの宮殿の記録を残しているが，その周囲にはアミールたちの冬営のための住居があったという[訳者注19]。

ウズベク・ハンの時代に，この都市を有名なアラブの旅行家イブン・バットゥータが訪れ，サライへの感嘆に満ちた記録を残している。イブン・バットゥータはとくに，この中世の大都市の巨大さと多民族性に注目している。彼の言葉によれば，この都市にはモンゴル人，アス人，キプチャク人，チェルケス人，

ロシア人，ビザンツ人，そしてイラク，シリア，エジプトの商人たちが住んでいた[訳者注20]。この都市にアルメニア人が住んでいたことも明らかであり，西ヨーロッパのさまざまな地域からの移住者も住んでいた。

サライの繁栄は14世紀に訪れたが，同世紀後半には，ゾロタヤ・オルダの内訌，アミール・ティムール（タメルラン）の遠征も相まって，都市生活の衰退がはじまっていた。貨幣資料によれば，1360～70年代の内訌ののち，トクタミシュ・ハンの時代〔在位左翼1378/9–; 1380–99[–1406]〕には都市の生活水準が復興したことが観察される。しかし，この復興は長くは続かなかった。ティムールの歴史家たちは，ティムールによる都市の破壊と焼き討ちについて伝えている。15世紀になると都市生活は復興した。ヨハネス・ド・ガロニフォンティブスは『世界の知識の書』（1404年）のなかで，最も重要なタタールの都市はサライであると伝えている[訳者注21]。1438年，サライをシーラーズの商人シャムス・アッディーン・ムハンマドが訪問した。シーラーズの商人がサライを訪問して交易を成功させたという事実は，再三にわたって研究者たちの注目を集め，論及されてきた[訳者注22]。この史料は，サライが15世紀前半においても重要な交易上の意義を持ちつづけていたことを証言しているが，しかし，サライを発行地とする15 世紀の貨幣の量は減少した。15世紀後半にはサライの重要性は低下した。サライの衰退がハージー・タルハン（アストラハン）の興隆と関連していることは明らかである。15世紀末～16世紀初頭において，サライは1480年のロシア軍の小部隊によって破壊されたことに関連して言及されている[訳者注23]。サライがさらなる破壊を受けたのは1502年であり，それはクリミアのメングリ・ギレイ［在位1468–69, 71–74, 75–76, 78–1515年］の遠征に関連している[訳者注24]。

文献史料は，この都市が多くのゾロタヤ・オルダのハンたちの埋葬地であったことを伝える。例えば『キプチャク史』〔18世紀前半〕には，ベルケが「サライの町で，バトゥのそばに埋葬された」という情報がある（Nasonov A.N., 1941, p. 119）[訳者注25]。ベルケの埋葬地がサライであることは，〔『集史』（1307–1310/1年）の著者〕ラシード・アッディーンや『シャイフ・ウワイス史』〔14世紀後半〕の無名氏〔アハリー〕によっても確認される（Tizengauzen V.G., 1941, pp. 76, 100）。17世紀の著者アブルガーズィーは，トクタ・ハン〔在位1291–1312/3年〕とジャーニーベク・ハンの埋葬をサライチクと結びつけているが[訳者注26]，おそらくアブルガーズィーの〔記述は〕，サライチクではなくサライと理解すべきであろう。17世紀のトルコの歴史家エヴリヤ・チェレビも，都市サライに多くの著名な人物が埋葬されたことに関する情報（いくぶん伝承的であるが）を紹介している（Chelebi, E., 1979, p. 142）。

現地のタタール人の伝承では，セリトレンノエ遺跡はジギト・ハジというある聖者の埋葬地に関連づけられていた。18～19 世紀の著作において，セリトレンノエ遺跡は多くの場合，「ジギト・ハジ」地区urochishche «Dzhigit-Khadzhi»と呼ばれている。ここで指摘すべきは，この名称〔ジギト〕は，「ジャディード」（「新」。貨幣〔の銘〕にあるサライ・アッジャディードを想起されたい）が転訛したものであろうということである。近年，ラパス Lapas村（セリトレンノエ近郊）で重要な中世の埋葬地の遺跡調査が行われてきた。この地にある廟は，14世紀の何人かのハンたちの墓の上に建てられた可能性がある[訳者注27]。

ゾロタヤ・オルダの首都は，手工業と交易の重要な中心地であっただけでなく，重要な文化の中心地でもあった。ゾロタヤ・オルダ時代の沿ヴォルガはイスラーム世界にとって不可欠な地域となった。首都サライは，学識ある法学者や神学者がいることでムスリム世界に知られていた。イブン・アラブシャーの情報によれば，最初にイスラームを受容したベルケ・ハンがはやくも学者たちを自分のもとに招いていたという。注目すべきは，多くの学者，神学者，詩人たちが自身の名にタハッルス〔雅号〕として「サラーイ

ー」（すなわち，「サライの」，「サライ出身」を意味する）を付けたことである。サライにはスーフィー教団が存在したとも考えられる。サライに住んでいた神学者たちは，ハナフィー派，シャーフィイー派，マーリク派といった，さまざまなイスラーム〔法〕学派に属していた。これに関しては，都市サライにおいてはハナフィー派がシャーフィイー派を数的に上回っていたという見解がある（Zaitsev I.V., 2004, pp. 184–185）。イブン・アラブシャーは，この首都に住む学者の一覧を示しながら，これらの人々の助力により「サライは学問の中心になった」と結んでいる（Tizengauzen, V.G., 1884, pp. 461–463）。現存する東方史料のおかげで，この都市に住んでいた学者の名が数多く知られている[訳者注28)]。トクタミシュ・ハンにより強制的にタブリーズからサライに連れてこられた詩人カマール・フジャンディー〔1320 頃–1400/1 年〕の都市サライに関する四行詩が残されているが，そこで彼はサライでの生活を牢獄での生活になぞらえている[訳者注29)]。

ウズベクとジャーニーベクの時代，都市の発展とともに，イスラームの説教師 propovednik の数も増えていった。ウマリーには，サライにマドラサを建てたのはウズベク・ハンであるという記録がある（Tizengauzen, V.G., 1884, p. 229）。文献史料の記録からわかるように，その首都ではさまざまな教育・宗教施設の総合的なネットワークが機能していた。「サラー〔サライ〕の町には金曜礼拝を挙行するための［大］モスクが 13 か所あって・・・それ以外の［一般の］モスクはと言えば，じつにたくさんある」とイブン・バットゥータは記している（Tizengauzen, V.G. 1884, p. 306[訳者注30)]）。セリトレンノエ遺跡のモスク跡は 18～19 世紀の旅行家たちによって記録され，また 20 世紀の考古学的調査のなかでも明らかになった。興味深いのは，セリトレンノエ遺跡の発掘調査において学生の手によるアラビア文字の断片が見つかったことである。

沿ヴォルガにおけるイスラームの中心地としてのサライの重要性にくわえ，この都市にはキリスト教徒の住民がいたことにも注目しなければならない。1261 年，キエフ府主教に属するサライ主教区 Saraiskaya pravoslavnaya eparkhiya が設立された[訳者注31)]。ある研究ではこの主教座 episkopskaya rezidentsiya はサライにあったとされるが，別の研究ではたんにゾロタヤ・オルダの首都にあったとされる。注意したいのは，セリトレンノエ遺跡の発掘調査において正教会に関連する資料は大量には発見されなかったが，その一方で，ツァリョフ遺跡からは，そこに大規模なロシア人居住区があったことを物語る多様な資料がよく知られていることである。

すでに 13 世紀末には，サライにカトリック修道院があった。サライにはフランチェスコ会修道士が訪れ，かなりの長期間この都市に滞在していた。サライにおいて，フランチェスコ会には，都市内部の修道院の他に，近郊の居留地もあった。しかし，フランチェスコ会の布教活動の成功が果たした役割を過大評価することはできない。ゾロタヤ・オルダにおけるカトリック教会はそれほどの影響力をもたなかったからである[訳者注32)]。

現在もサライの考古学研究は続けられている。しかしながら，これまでのところ，20 世紀後半の長年にわたる発掘調査の資料の多くは学問的な利用に供されていない。セリトレンノエ遺跡近郊もまだ十分には研究されないままである（諸史料はサライ地方 vilayet について伝えているのである）。ゾロタヤ・オルダの首都の数とその位置に関する問題は，現在白熱した議論の対象となっている。しかし，残念ながらいまのところ，文献史料，考古学そして貨幣学の資料から得られるサライに関する情報のすべては，まだ一つの研究にはまとめられていない。

参考文献

1) Bartol′d V.V., 2002. Berkai // Bartol'd V.V. Raboty po istorii i filologii tyurkskikh i mongol'skikh narodov. M.

2) Evstratov I.V., 1997. O zolotoordynskikh gorodakh, nakhodivshikhsya na mestakh Selitrennogo i Tsarevskogo gorodishch (opyt ispol′zovaniya monetnogo materiala dlya lokalizatsii srednevekovykh gorodov Povolzh′ya) // Epokha bronzy i rannii zheleznyi vek v istorii drevnikh plemen yuzhnorusskikh stepei. Ch. 2. Saratov.

3) Zaitsev I.V., 2004. Astrakhanskoe khanstvo. M.

4) Nasonov A.N., 1940. Mongoly i Rus′ (istoriya tatarskoi politiki na Rus′). M.-L.

5) Tizengauzen V.G., 1884. Sbornik materialov, otnosyashchikhsya k istorii Zolotoi Ordy. T. I. SPb.

6) Tizengauzen V.G., 1941. Sbornik materialov, otnosyashchikhsya k istorii Zolotoi Ordy. T. II. M.-L.

7) Fedorov-Davydov G.A., 1994. Zolotoordynskie goroda Povolzh'ya. M.

8) Chelebi E., 1979. Kniga puteshestvii. T. II. M.

訳者注1) 本政権は「ジョチ・ウルス」，ロシア語文献では「ゾロタヤ・オルダ Zolotaya Orda」（「黄金の天幕／金帳」の意），またその訳として Golden Horde などと呼ばれる。日本では一般に「キプチャク・ハン国」とも呼ばれる。本政権の呼称をめぐる議論については，川口琢司・長峰博之「ジョチ・ウルス史再考」『内陸アジア史研究』28, 2013, pp. 28–32; Charles J. Halperin, “On Recent Studies of Rus' Relations with the Tatars of the Jochid Ulus,” *Zolotoordynskoe obozrenie*, 8(1), 2020, pp. 32–34; Marie Favereau, *The Horde: how the Mongols changed the world*, Cambridge, Mass., 2021, pp. 10–13; I.A. Mustakimov, “Ulus Dzhuchi – Zolotaya Orda: nazvaniya gosudarstva v srednevekovykh istochnikakh,” *Tiurkologicheskie issledovaniya*, 5(1), 2022, pp. 8–101 などを参照。

訳者注2) 遊牧政権であるモンゴル帝国の君主たちは天幕に居住し，季節移動をしていた。ジョチ・ウルスの君主たちもそうであり，統治の中心として真の「首都」はサライではなくハンの天幕であった（Thomas T. Allsen, “Saray, or Sarai,” *Encyclopaedia of Islam, 2nd Edition*, vol. 9, Leiden, 1997; Favereau, *The Horde*, p. 122）。

訳者注3) 赤坂恒明「キプチャク草原の都市遺跡：3 つのサライ（ロシア，カザフスタン）」『NHK スペシャル 文明の道 5 モンゴル帝国』NHK 出版, 2004, pp. 240–241.

訳者注4) サライ・バラカ／ベルケの「バラカ」がアラビア語の「神の御利益」「霊験」を意味することから，イスラームに入信したベルケの名前に由来づけて使われ，旧サライがあたかもベルケによって建設されたように誤解されたという（イブン・バットゥータ（著）イブン・ジュザイイ（編）家島彦一（訳注）『大旅行記』4，平凡社, 1999, pp. 449–450）。

訳者注5) サライの数と位置の問題とあわせて，季節移動と「首都圏」，ハンたちの「墓所」の問題についても検討した（長峰博之「サライはどこに？：ジョチ・ウルスの「首都」サライをめぐる近年の研究動向によせて」『西南アジア研究』95, 2022, pp. 76–100）。

訳者注6) パチカロフ氏の説は以下の論文においてさらに具体的に述べられている。A.V. Pachkalov, “K voprosu ob imeni zolotoordynskogo goroda, nakhodivshegosya na meste Krasnoyarskogo gorodishcha v del′te Volgi,” *Srednevekovye tyurko-tatarskie gosudarstva*, 2, Kazan′, 2010, pp. 300–309, A.V. Pachkalov, “K voprosu o mestopolozhenii Starogo Saraya,” *Zolotoordynskaya tsivilizatsiya*, 4, 2011, pp. 40–46（Pachkalov, *Zolotaya Orda po dannym numizmaticheskikh istochnikov,* pp. 40–51 に改訂版が“Staryi Sarai i ego mestopolozhenie”として収録）。その他，サライをめぐる諸研究については，長峰「サライはどこに？」に挙げられているものを参照されたい。

訳者注7) ルブルク「旅行記」高田英樹（編訳）『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会, 2019, p. 279.

訳者注8) 742 年シャウワール月（1342 年 3–4 月）にウズベクは「新サライ Ṣarāy al-jadīd」で亡くなったと伝えられている（*Sbornik materialov, otnosyashchikhsya k istorii Zolotoi Ordy 1. Izvlecheniya iz sochnenii arabskikh,* V. Tizengauzen (ed. and tr.), Sanktpeterburg, 1884, pp. 254, 263, 445, 447; イブン・バットゥータ『大旅行記』4, p. 114, n. 140）。ただし，ウズベクの没年については 1341 年説もある（Roman Hautala, *V zemlyakh «Severnoi Tartarii»: Svedeniya latinskikh istochnikov o Zolotoi Orde v pravlenie khana Uzbeka (1313–1341)*, Kazan′, 2019, p. 86, n. 130）。

訳者注9) ジョチ・ウルス領を旅したフランチェスコ会修道士マリニョッリは，1339 年に「サライのタルタル人が洪水で破滅する」という予言を聞いている（マリニョッリ「ボヘミア年代記」高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』p. 665）。

訳者注10) 例えば，ヨーロッパのカタラン・アトラス（1375 年）やフラ・マウロ図（1459 年）などの地図上にサライが描かれ，「サッラ〔サライ〕帝国 l’imperi de Sarra」「サライのオルド LORDO DE SARAY」などの表現が見られる（「カタラン・アトラス」高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』pp. 777, 783, 785–786; Piero Falchetta, *Fra Mauro’s World Map: with a Commentary and Translations of the Inscriptions*, Jeremy Scott (tr.), Turnhout, 2006, p. 623）。東方史料にも，「サライ地方 bilād

Ṣarāy」（*Géographie d'Aboulféda*, M. Reinaud (ed.). Paris, 1840, p. 216; *Géographie d'Aboulféda*, M. Reinaud (tr.), 2(1), Paris, 1848, p. 323），「サイン・ハン〔バトゥ〕の玉座のあるサライ地方 Sarāy vilāyatı」などの表現が見られる（ウテミシュ・ハージー（著）川口琢司・長峰博之（編）菅原睦（校閲）『チンギズ・ナーマ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2008, p. 36; Nurlan Kenzheakhmet, "The Tūqmāq and the Ming China: The Tūqmāq and the Chinese Relations during the Ming Period (1394–1456)," *Zolotoordynskoe obozrenie*, 5(4), 2017, p. 771）。中国史料では「撒來〔サライ〕」として言及される（Kenzheakhmet, "The Tūqmāq and the Ming China," pp. 772, 780）。

訳者注11） サライは「近習の話」に登場する（菊池秋夫「チョーサーの「近習の話」におけるモンゴル帝国表象」『東北ロマン主義研究』2, 2015, p. 4）。

訳者注12） フィリップ・ド・メジエールの『老いたる巡礼者の夢 *Le Songe du Viel Pelerin*』（1389 年）にサライは言及されている（Philippe de Mézières, *Songe du Viel Pelerin*, 1, Joël Blanchard (ed.), Genève, 2015, pp. 194–195）。フィリップ・ド・メジエールについては，竹中徹「フランス王権とニコポリスの敗戦：『嘆きと慰めの書簡』の分析から」『パブリック・ヒストリー』13, 2016, pp. 22–23 を参照。

訳者注13） ヤクボフスキー「金帳汗国首都サライの研究」ヤクボフスキー，グレコフ（共著），播磨楢吉（訳）『金帳汗国史』生活社, 1942, p. 289.

訳者注14） ルブルクに言及されるスムメルケント（ルブルク「旅行記」高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』p. 280）の位置については諸説があるが，近年ヴォルガ川下流域の遺跡の調査を精力的に進めている D.V. ヴァシーリエフはそれをヴォルガ・デルタのモシャイク遺跡に比定し，さらにサクスィーンを同じくヴォルガ・デルタのサモスデルカ遺跡に比定している。またヴァシーリエフによれば，サモスデルカ遺跡こそがハザルの「首都」イティルの候補地でもある（Emma Zilivinskaya, Dmitry Vasilyev, "Cities of the Golden Horde," R. Khakimov et al. (eds), *The Golden Horde in World History*, Kazan, 2017, pp. 642–643; D.V. Vasil'ev, "Dvadtsat' let issledovanii Samosdel'skogo gorodishcha: rezul'taty, problemy, interpretastiya," *Trudy KAEE PGGPU*, 16, 2020, pp. 64–75）。アルメニアの歴史家ヘトゥム（1307 年）は，クマン人の中心都市サライをタルタル（モンゴル）人が破壊して奪ったと伝える（Het'um the Historian, *History of the Tartars: The Flower of Histories of the East*, Robert Bedrosian (tr.), revised, Sophene Books, 2021, p. 7）。サライがクマン人の中心都市だったというのはヘトゥムの誤解であるが，先行する遊牧国家の拠点とサライの位置の相関性の有無は重要な論点であろう（cf. 長峰「サライはどこに？」p. 83–84, n. 24）。

訳者注15） G.A. Fedorov-Davydov, *Zolotoordynskie goroda Povolzh'ya*, Moskva, 1994, pp. 24–27; Favereau, *The Horde*, p. 237.

訳者注16） ペゴロッティ「商取引実務」高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』pp. 709–724. この「北の道 northern road」がジョチ・ウルスにとっていかに重要であったかについては，ジョチ・ウルスに関する最新の通史を著した M. ファヴロが 1 章を割いて詳述している（Favereau, *The Horde*, pp. 206–246）。

訳者注17） 「カタラン・アトラス」高田『原典 中世ヨーロッパ東方記』pp. 785–786.

訳者注18） アブー・アルフィダーがサライの奴隷市場について伝えている（*Géographie d'Aboulféda*, p. 217; *Géographie d'Aboulféda*, 2(1), p. 323; Uli Schamiloglu, "The Rise of Urban Centers in the Golden Horde and the City of Ükek," *Zolotoordynskoe obozrenie*, 6(1), 2018, p. 24）。

訳者注19） *Das Mongolische Weltreich: Al-'Umarī's Darstellung der mongolischen Reiche in seinem Werk Masālik al-abṣār fī mamālik al-amṣār*, Klaus Lech (ed), Wiesbaden, 1968, p. 81; イブン・バットゥータ『大旅行記』4, p. 448.

訳者注20） イブン・バットゥータ『大旅行記』4, pp. 82–84. サライ訪問前後のイブン・バットゥータのクロノロジーは明確ではない（サライ訪問は 1332～34 年の間）。この問題については，イブン・バットゥータ『大旅行記 』4, pp. 420–427, 447, 450–456; 家島彦一『イブン・バットゥータと境域への旅：『大旅行記』をめぐる新研究』名古屋大学出版会, 2017, pp. 69–74, 292–304 を参照。そのため，イブン・バットゥータが訪問したのが新旧どちらのサライであるのかの判断は難しい。すなわち，定説ならば旧サライを訪れたことになるが，新説ならばそれは新サライとなる（長峰「サライはどこに？」p. 86, n. 33）。

訳者注21） スルターニーヤ大司教ヨハネス（ジョン）は 15 世紀初頭にティムールの使節としてヨーロッパ諸国を訪問した（Lajos Tardy, "The Caucasian Peoples and Their Neighbours in 1404," *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung*., 32(1), 1978, p. 90）。

訳者注22） B.N. Zakhader, "Shirazskii kupets na Povolzh'e v 1438 g. (K voprosu o russkikh ekonomicheskikh svyazyakh s Sibir'yu, Srednei Aziei i Perednim Vostokom)," *Kratkie soobshcheniya Instituta vostokovedeniya*, 14, 1955, pp. 14–19; V.L. Egorov, *Istoricheskaya geografiya Zolotoi Ordy v XIII–XIV vv.*, 1985, Moskva, pp. 116–117.

訳者注23） いわゆる「ウグラ河畔の対峙」に際してのことである（G・ヴェルナツキー（著）松木栄三（訳）『東西ロシアの黎明：モスクワ公国とリトアニア公国』風行社, 1999, pp. 84–85）。「ウグラ河畔の対峙」については，川口琢司・長峰博之「15 世紀ジョチ朝とモスクワの相互認識：ロシア語訳テュルク語文書を中心に」小澤実・長縄宣博（編著）『北西ユーラシアの歴史空間：前近代ロシアと周辺世界』北海道大学出版会, 2016, pp. 204–206; Favereau, *The Horde*, p. 300; 宮野裕『「ロシア」は，いかにして生まれたか：タタールのくびき』NHK 出版, 2023, pp. 89–101 も参照。

訳者注24） 通説では 1502 年にクリミア・ハン国によってサライは破壊されたとされるが，V.V. トレパヴロフによれば，このときクリミア軍はサライを攻撃してはいない（V.V. Trepavlov, *Bol'shaya Orda – Takht eli: Ocherk istorii*, Tula, 2010, p. 91, n. 397）。また，この 1502 年をもってジョチ・ウルスの滅亡とするかについては長い議論がある。この議論については，Favereau, *The Horde*, p. 300–301; 長峰博之「ジョチ・ウルス後裔政権史料は何を参照し，ジョチ・ウルス再編をいかに認識したの

か？」野田仁（編）『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2023, pp. 38–39 を参照。

訳者注25) 『キプチャク・ハン史』（『キプチャク史』）パリ写本によれば，ベルケは「サライの町で，彼の兄弟バトゥ・ハンのそばに埋葬された」とあり（Qipchāq Khān, *Tārīkh-i Qipchāq Khānī*, Ms. Bibliothèque Nationale, Supplément Persan 187, f. 396b），バトゥもサライに埋葬されたことを示唆する。しかしこれは，もともとは「サライ・バトゥに埋葬された」という意味だった文が後代に誤解された結果である可能性がある（長峰「サライはどこに？」p. 91, n. 53）。

訳者注26) *Histoire des Mogols et des Tartares par Abu l-Ġāzī Bahādur Ḫān*, Le Baron Desmaisons (ed.), 1, St.-Pétersbourg, repr., Frankfurt am Main, 1994, pp. 174, 176.

訳者注27) かつて V.I. エゴロフは，ラパス遺跡の 4 つの巨大な墓廟跡を，イスラームを受容したベルケ，ウズベク，ジャーニーベク，ベルディベク（在位 1357–1360/1?年）のものと推定した（Egorov, *Istoricheskaya geografiya Zolotoi Ordy v XIII–XIV vv.*, pp. 117–118）。近年ラパス遺跡の調査を進めているヴァシーリエフによれば，さらにいくつかの墓廟跡が見つかっており，ヴァシーリエフはそれらをウズベクと息子ティニベク，その親族のものとしている（D.V. Vasil′ev, “Gorodishche Ak-Sarai,” *Arkheologiya Nizhnego Povolzh'ya na rubezhe tysyacheletii,* Astrakhan′, 2001, p. 72; D.V. Vasil′ev, “Mavzolei u poselka Lapas: vzglyad iz kosmosa,” *Arkheologiya evraziiskikh stepei,* 4, 2018, p. 25; Zilivinskaya, Vasilyev, “Cities of the Golden Horde,” p. 643）。ジョチ・ウルスのハンたちの「墓所」については，長峰「サライはどこに？」pp. 90–93 も参照。

訳者注28) イブン・バットゥータもサライの学者たちについて伝えている（イブン・バットゥータ『大旅行記』4, pp. 83–84）。サライの学者については，D.R. Zainuddinov, “Uchenyi iz Saraya – Mavlyana Zada as-Sarai (754/1353–791/1389) – v biograficheskom slovare al-Makrizi Taki ad-Dina (766/1365–845/1441) «Kitab al-mukaffa al-kabir» (Bol′shaya rifmovannaya kniga),” *Zolotoordynskoe obozrenie*, 5(1), 2017, pp. 126–137 も参照。興味深いことに，ウズベクの息子ティニベクに献呈されたことで知られるクトゥブ『ホスロウとシーリーン』（1341/2 年。ニザーミーのペルシア語作品のテュルク語版）のより完全な著者名は，クトゥブ・アッディーン・サラーイーであるという（Devin DeWeese, “The predecessors of Navā'ī in the *Fulūn al-Balāghah* of Shaykh Aḥmad b. Khudāydād Ṭarāzī: a neglected source on Central Asian literary culture from the fifteenth century,” *Journal of Turkish Studies*, 29, 2005, p. 130; 菅原睦「クトゥブ『ホスロウとシーリーン』導入部から：ペルシア語原作との対照」『ユーラシア諸言語の多様性と動態』20, 2018, p. 422, n. 6）。

訳者注29) カマール・フジャンディーは 1385 年にトクタミシュによってサライに連れてこられ，1395 年にトクタミシュがティムールに敗走させられたのちにタブリーズに帰還した（Paul Losensky, “Kamāl Kojandi,” *Encyclopaedia Iranica* [https://www.iranicaonline.org/articles/kamal-kojandi]）。

訳者注30) イブン・バットゥータ『大旅行記』4, p. 83.

訳者注31) J. フェンネル（著）宮野裕（訳）『ロシア中世教会史』教文館, 2017, p. 273.

訳者注32) サライのキリスト教徒については，佐口透『東西文明の交流 4 モンゴル帝国と西洋』平凡社, 1970, pp. 234–235; Roman Hautala, “Catholic Missionaries in the Golden Horde,” *The Golden Horde in World History*, pp. 323–328 などを参照（とくに，R. ハウタラが近年このテーマについて精力的に研究を進めている）。

[受理年月日　2023年9月15日]